

「ヘロイン」ノ應用

微 陽 大塚 義 男稿

余が開業地に於ける醫術究研を目的とせる博愛會は春秋二季第三高等學校醫學部教授菅及坂田兩學士の臨席を乞ふを常とせり時き明治三拾貳年十月廿二日の例會に際し菅學士は「ヘロイン」ノ經驗上其有効なるを説き並て全丸劑（一九〇、〇〇五含有）を惠與せらる

茲に於て余は肺結核患者小川某（男十九歲）の瀕死は應用したり患者は体格不良衰弱瘦削咳嗽刺戟甚たしく呼吸淺表促迫して一分時四拾貳回吸氣甚た短縮して呼氣著く延長せり僅に數人の看護に由て端坐呼吸を行ひ得るのみ而して心動迅速脈性系狀而して百三拾八を數ふ日晡潮熱盜汗甚たしく体温三拾九度以上にあり己に九日間毫も睡眠せず其苦悶狀眞に言に堪へたり依て菅學士惠與の丸劑（〇、〇〇五）一粒を與ふ用後三十分にして奇ある哉忽ち睡眠を催し呼吸易く吸氣延長呼氣短縮して呼吸數を減し僅に貳拾九回に至り心動緩靜脈搏も從て減少して百八個を算するのみ著く咳嗽減退祛痰し易く体温は三拾八度に下る而して更に安靜の狀態を呈し嗜眠正に三時醒て益安靜廿四時間毫も苦悶せざりしも亦一粒を投與せざるべからざるの悲境に陥りたり再一粒を投するに其奇効前日と全一あり廿時を經過して亦一粒與ふ繼續すること茲に八時遂に鬼藉に入る蓋し「ヘロイン」は他覺的及自覺的に於ては斯く著明の効績ありたりと雖決して原因的輕快を覺へたるにはあらず

喘息患者大石某（男三十四年）に應用したるに〇、〇〇五を一日二回與へたるに第二日目朝は已に大

に其發作を減退し苦悶を去り安靜を得るを得たり七日持續投藥して全く其發作を鎮靜し得たり
管學士惠與の丸劑全く盡きしかば大坂蓮井藥舖に電を飛ばし「ヘロイン」を求む僅に八、〇を送り來た
る全業四名に分ち各二、〇を手にせり

第一「ヘロイン」の性状

「ヘロイン」は莫兒比涅 $\text{C}_{17}\text{H}_{19}\text{NO}_3$ の重醋酸殘基 $\text{C}_{17}\text{H}_{17}\text{OOCCH}_3\text{NO}_3$ により白色結晶狀の粉末をす
な而して水に溶解し難し「ヘロイン」は「モルヒネ」の如く鹽酸と化合して鹽酸「ヘロイン」を形成す此鹽
酸化合物は水に溶解し易くして皮下注射に適用す

第二「ヘロイン」の應用實檢

余が實檢應用(昨十月末より本年三月末迄)せるもの正は百貳拾八名に及ぶ其間或は奇効を奏せるもの
あり較効績の顯はれたるあり或は全く無効のものあり中毒を起したるものあり蓋し中毒せるものは最
も著しく奏効せしものに限るを認む然れども余は原より試験的に應用せしものなれば其用量殆んど常
に一定せず時としては一、二回若くは二回永續したるものあり或は只僅に一回の頓用に限れる場合あ
るも亦頓用持續の方法を取りたることあり斯の如く千差万別時より患者の年令體質男女及症狀の輕
重を異にするに従ひ猶症病の種類性質より其用量用法を異にせるを以て成績一定せざるは勿論の事
なれども一般推論せば實に有効奇驗の靈藥と稱すべきなり余は茲に其實驗の詳細を擧述せんとするも
却て繁雜を招くの恐れあれは左に其要項をのみ畧記せん乞諒せよ

患者數	性別	年齡	疾 病	區別	著効	較効	無効	中毒	用 量
男	最高	肺結核	九一	男					一日最大
八二	七二	氣管枝炎	一二	五四	二一	七	二	〇、〇六	最少
百二十八		肺氣腫	五						〇、〇一
女	最少	喘 息	七	女	一五	〇	一		頓最大
四六	五	神經痛	四	三一					〇、〇五
		百日咳	一						最少
									〇、〇〇五

余は職として肺結核を治療せんとせるものなる故を以て呼吸疾病の外殆門を出入せず爲めに「ヘロイン」實驗も肺結核最も多しとす今各疾病の種類に因て概論せんに

1. 肺結核

患者數	性別	年 令	著効	較効	無効	中毒	平均用量
男五四	最高四八	男四〇	一三	一	男一	一日〇、〇二	
九一	女三七	最少一六	女二三	一四	〇	〇	頓〇、〇一

例、大山某(男四十二年)昨年一月肋膜炎に罹り四月下旬殆んど治療五月下旬咳嗽頻發咯痰少量、七月中

旬全餘臥床未だ起たず遂に結核に冒さる（「ヘロイン」試用當時咳嗽刺激劇甚時としては爲めに吐瀉を催し且て安眠せず切々喀痰あり身体疲削盗汗屢至り大に衰弱常習便秘を呈す右肺全部大少の水泡音ありて上肺輕濁音を呈す左肺尖已に炎症を併發せり而して萎縮す脉搏平均百〇五呼吸常に淺表よして三拾以上を算す蓋し咳嗽甚たしきか爲めに呼吸困難を呈せるを以てあり居常苦悶を訴て止まず茲に於て余は「ヘロイン」〇、〇〇五を與へんとして誤て〇、〇五を與ふ然れども幸に患者は凡て麻酔藥殊に「モルヒネ」〇、〇五は抵抗するの性あるをを以て中毎を呈せず却て内服貳拾五分後忽ち一種云ふ可からざる愉快感あり胃部に於て異性の音を發す而して壯快直に咳嗽刺激を去り毫も咳意を催さず吸氣非常に容易く呼吸數を減して貳拾三とあり脉搏下て八拾に至り而して快く嗜眠すること正に貳時醒后更に壯快全く病苦を脱し健康の身となりたるの感ありしむ持續する貳拾六時更に一包を請ふ然れども余は前誤を顧み反て〇、〇一に減して服用せしむ較其効の見ゆるあるも僅に五時間にして亦原の苦悶に復す遂に〇、〇三を一日頓用一回宛持續したり斯の如くする殆ど一ヶ月にして咳嗽大に減したるを以て貳拾日間「ヘロイン」の服用を止む然るに亦咳嗽頻發止むなく〇、〇六を分眠せしめたることさへありたりき其効驗忽ちに顯れ患者は勿論吾さへ常に驚きつゝありき

「ドクトル、ホルトカンフ」は肺結核患者の發熱咳嗽甚たしきものに用ひたるが（用量夜間二時間内に二回〇、〇〇五宛）体温下降して盗汗を去り咳嗽減退して頗る安靜を得たりと

2. 急性慢性氣管枝炎

患者總數 性別 年令 著効 輕効 無効 中毒 平均用量

男七 最高七二 男五 一 一 〇 一日量〇、〇三

一二 女五 最小一八 女四 一 〇 〇 頓用〇、〇一

其成績佳良咳嗽を去り安靜を覺ゆ然れども藤岡某(男七十二年)は已に慢性氣管炎にて困りしものなるが咳嗽切々祛痰し難く非常に苦悶せり余は一日〇、〇三分二包一日二回内服せしめ四日間持續せしも更に其効を見ず「ドクトル」「ホルトカンブ」大に有効を稱せり

3. 肺氣腫

患者數 性別 年令 著効 輕効 無効 中毒 平均用量

五 男三 最高六五 男一 男一 男一 男〇 一日〇、〇二

女二 最下一一 女一 女一 女〇 女一 頓用〇、〇一

其結果比較的不良加之山田某(女二十一年)は較奏効を見たるのみにして却て中毒をなしたり

「ドクトル」「ホルトカンブ」は〇、〇〇五宛一日三回投用して肺氣腫の咳嗽を止め安靜を得せしめたり

「ドクトル」「レオ」は七十一歳の老人に付て朝夕〇、〇五を用ひたるに其効著顯八日にして四年の肺氣

腫を治したりと

醫學士は四十一年男某に「ヘロイン」丸(〇、〇〇五)を朝夕二回一粒宛用ひたるは呼吸容易く咳嗽減退大に快氣を得たり而して三日にして患者の來院せざるに至り其結果を見ずと

4. 喘 息

余は氣管枝喘息及神經性喘息を問はず單に喘息として論せんとす

患者數 性 別 年 令 著 効 輕 効 無 効 中 毒 平均用量

七 男五 最高五三 男四 男一 男〇 男〇 一日量〇、〇三

女二 最下一七 女二 女〇 女〇 女〇 頓 〇、〇一

患者中定敏某(四十八年女)は喘息發作時外と雖肥胖病の爲めは片時も横臥し得ざる体格にして十年以前より喘息發作あり抱水クロラル五、〇頓「モルヒネ」注射〇、〇三よて辛じて輕快し得るものなるが「ヘロイン」〇、〇二宛一日二回二日にして多くは發作を殆ど全く鎮靜し得たり、其他患者何れに於ても實に驚くべき効驗あり實に「ヘロイン」は喘息の特効藥と稱するも可ならんか
菅醫學士も喘息に用て大に有効なりと已の實檢説をなせり

5. 胃 瘧

は神經性のもゐり亦加答兒性のもゐりと雖別は區分せず

患者數 性 別 年 令 著 効 輕 効 無 効 中 毒 平均用量

八 男八 高三八 男三 男二 男三 男一 〇、〇一

女〇 下一二 女〇 女〇 女〇 女〇 〇、〇二頓用

奏効著しきものありと雖亦更に無効のものあり加之中毒者をも出したる「ヘロイン」は「モルヒネ」内服

よりも其効顯贖遅く且つ其効力劣等に居るか如く然れども硫酸「モルヒネ」の如く鹽酸「ヘロイン」皮下注射は或は奏効確實なるへきや未だ曾て實驗せざれば論の限りにあらず

「ホルトカンパ」ハ「モルヒネ」よりも「ヘロイン」小量にして迅速に且確實に胃瘧を治すべしと尙腸胃炎に大に効ありと云へり

6. 神經痛及百日咳

神經痛は肋間神經及三叉神經の疼痛を意味す（肋、男二名三、男二名に於て百日咳は五年の小兒男なりき然るに神經痛に於ては（三、一名肋、一名）著明の効驗ありたり即〇、〇二分服三日にして疼痛を止めたりと雖も二名の全く無効者を出したり故に余は神經痛に在ては十分の効驗なかりしものと云はんとす」百日咳に於ては〇、〇〇二を一日四回分服四日にして全く其効を見ず然れども彼の「ホルトカンパ」は坐骨神經痛に二時間毎に〇、〇〇二五宛更に夜間十時に〇、〇〇一を與へたり而して第三日目よりはは毎夕〇、〇一宛を頓用せしめ六、七日にして快復するを得たり百日咳に付ては年齢に従て其量を異にすべきも大凡〇、〇〇〇五―〇、〇〇二を分服二日間よして發作を鎮靜したりと余其經驗少なきを以て未だ其如何を判する能はず

第三 中毒症

藥品の何を問はず中毒を起す場合は常に一定せず即ち其體質体力、生活の状態等に由て大に等差あり「ヘロイン」中毒は余が採用患者百貳拾八名中僅に三名に過ぎず而して多くは頭痛頭重に止まる可きも

時としては尙不快の感起り悪心を發し嘔氣嘔吐眩暈を呈せしものあるを認めたり

「カルボニトリソレー」は誤て一回〇、一七を用ひて著しき中毒を起したり即ち服用後直に不快を呈し四時間にして高度の衰弱を來し視力減退瞳孔縮小脉搏糸狀緩徐となり從て体温下行三十五度に至り四肢痙攣を起し搐搦を起す惡心より嘔氣ありて苦悶見るに忍ざりき而して珈琲涅〇、一を一日一回宛三日間皮下注射して遂に治するを得たり然れども余は單に鹽リモ水のみを以て回復するを得せしめたり、蓋し其症狀輕少なりしを以ての故ある可きか

第四 「モルヒネ」と「ヘロイン」の對照

余は未だ其勝劣を判定するに苦しむと雖「ホルトカンブ」は「ヘロイン」は其効驗確實にして且迅速「モルヒネ」よりも少量にして足るのみならず惡副作用を呈することなし故に「ヘロイン」を以て勝れりとす

「ヘルナック」は動物試驗上恐る可き中毒を起す藥品ありとせり

「ドット」は兎及犬に應用して「ヘロイン」を賞賛したり

醫學士も或場合に於ては「モルヒネ」よりも「ヘロイン」を勝れりと云へり

「レオ」は「ヘロイン」は鎮咳の効確實にして肺結核及急性慢性氣管枝加答兒喉頭炎に適用すべし而して遙に「モルヒネ」「コデイン」の上にありとせり而して「ヘロイン」は恰も實麥答利斯が心臟に作用するが如く肺及氣管枝等の呼吸系病患を治すと

第五 結 論

- a. 用量、一日〇、〇一〇、〇五 一回頓用〇、〇〇五—〇、〇二
- b. 鎮咳「ヘロイン」の最も奇効とする處にして凡ての咳嗽を發すべき疾病に應用すべし殊に喘息に効ありとす
- c. 祛痰の作用著し
- d. 鎮症胃痙等を鎮靜す
- e. 鎮痛 神經痛諸病
- f. 催眠 の効ありて安靜を得べし
- g. 呼吸 を容易ならしむ即吸氣を増進延長—呼氣を短縮せ—めて空氣が肺中に於ける交換作用盛となるを去り脉勢を鎮靜す
- h. 熱 を去り脉勢を鎮靜す
- i. 他麻酔藥「モルヒネ」の無効なる場合に於ても奏効あるあり
- j. 食欲 振ひ腸胃を治するのみならず決して冒すことなし
- k. 中毒 作用緩徐
- l. 微候 的治療藥にして多くは一時の發作を鎮靜するに足るのみ
- 「ヘロイン」は實に特殊の効力を有する藥品にして内科醫殊に呼吸器病治療醫たるもの一日も欠く可か

らざる者なり已に應用さるこの士は識るらん未だ其味を知らざるの士は奮て試用せよ其奇効を歎賞せらるゝあるは余の誓ふ處なり

左の一篇は第八回九州醫學會に於て演じたる一小實驗にして固より淺學不材の淺驗本紙の餘白を汚すは何となく後めたき心地すれど聊か皮膚病學者の參考に供せんとてかくはものしつ

鬼舐頭 *Chopchin ussato* の七例に就て

山口 清 隆 述

第一例 四十八年男 官吏 稟賦健全にして幼時麻疹を輕過し時々感冒に冒されたる事ありしも先づ記すべき疾患に罹りたることなし、遺傳性疾患を認めず、性來酒を嗜むの癖あり、明治十曆西南の役從軍して左上膊穿通銃創の難に遇ふ數閱月にして創傷は治癒せしも機能に障害を貼し左上肢は全く廢物に歸せり、三十歳にして淋疾を憂ひ月餘よして醫治により全治す、五六年前後頭結節部よ五厘銅貨大の脫毛部を初めとし漸々年を重ねるに従ひ頭の全面を犯侵したるを以て醫學士某氏の診療を乞ひイヒチオール精を處せられしも寸効なく却て身体所々に蔓延し眉毛、鬚髯を初め腋下陰毛に至る迄一として餘す所なく波及せり爾後各地に轉往中必ず該地の名醫に託し診療を請ひしも皆効なく遂に該疾病は治すべからざる者として放任せり

第二例 二十七年女 農業 性來健康にして十六歳の時月花初めて開き爾後整然毎四週を間して來り、著明の疾病に罹りたることなく遺傳の關係なきが如し、明治三十二年春の頃理髮の際俄然一